

処刑される悪役令息に転生
したので断罪役の騎士団長
に媚びたら、逃げるたび捕
まってケツの奥まで溺愛さ
れています

異世界転生BL・全10話

体 験 版

1

第1話

媚びたら効きすぎた

「団長。これ、どうぞ」

俺がそう言うと、騎士団長が動きを止めた。

王城の練兵場。夕方の五時。砂の上に、まだ二十人ばかりが残っている。

俺は油紙の包みを差し出していた。中身は焼き菓子だ。台所から持ってきた。

団長は俺を見た。それから包みを見た。

周りの騎士が全員こっちを見ているのが、背中ではわかる。

「何の用ですか」

団長が敬語を使うのは、俺が侯爵家の人間だからだ。中身の話ではない。

「用？用はない。差し入れだよ。差し入れっていうんだ、こういうのは」

言ってから、説明しすぎたと思った。

「侯爵家の方が、練兵場に」

「悪いのか。悪いなら持って帰るけど」

団長は答えなかった。

この男の名前はディーン・クロウ。三十四歳。
王国騎士団長。

俺より頭ひとつ高い。首から肩にかけて分厚い。黒髪は短く刈ってある。

灰色の目。左の眉に、切れた古い傷。

そして俺は、この男に一年後に殺される。

＊

説明しておく。

俺は前の世界で『銀の剣と灰の王冠』という小説を読んでいた。全九巻。完結済み。

夜勤の工場で、休憩のたびに少しずつ読んだ。

読み終わった二日後に、俺は休憩室で倒れて死んだ。

三日間、誰にも見つからなかったらしい。

その話は、こっちの世界では誰にもしていない。

目が覚めたら、俺はラウル・ヴェスタリアになっていた。

侯爵家の次男。二十六歳。第三部の悪役だ。

やることは決まっている。王太子の茶に毒を盛る。盛ったことになる。

実際に盛るのは婚約者のミラン・ソルグで、罪をかぶるのが俺だ。

そして騎士団長ディーン・クロウに、大広間で斬られて死ぬ。

原作でのディーンの扱いを書いておく。

台詞は三つ。「御命により」「動くな」「終わりだ」

顔の描写はない。年齢の記載もない。誰とも寝ない。

名前のついた家具みたいな男だった。

だから俺は考えた。

——家具に好かれておけば、斬られないんじゃないか。

我ながら安い作戦だ。だが元手が焼き菓子なら、失敗しても損は小さい。

＊

団長は包みを受け取った。

受け取って、そのまま持っていた。開けない。

「では」

「食べよ。今」

「……後で」

それだけ言って、団長は背を向けた。

部下の一人が駆け寄ってきて、何か報告している。団長は頷いただけだった。

俺は練兵場を出た。

石段を降りながら、右の手首を擦った。

縄の痕がある。鞍から落ちて、足を掛けたまま引きずられたときのものだ。

追い詰められると、ここを擦る癖がついた。

断罪の日まで、あと一年ある。

悪くない出足だと思った。

＊

夜。

自室の燭台を消そうとしたところで、扉が叩かれた。

従者のコルトは下がらせてある。この時間に来る人間はいない。

「誰だ」

「クロウです」

俺は燭台を戻した。

扉を開ける。廊下に、昼と同じ男が立っていた。

鎧は脱いでいる。黒いシャツの袖を肘までまくっていた。

腕の太さが、鎧を着ているときより分かる。

「何か用か」

「話がついています」

「……は？ 何の話が」

「侯爵にも、ソルグ家にも」

「いや待て、順番。順番がおかしいだろ。何
の話をつけたのか先に言え」

俺は扉の枠を掴んだ。

——待て。

原作にこんな場面はない。一行もない。

この男は第三部の大広間まで出てこない。そ
れまでは名前すら出ない。

「あなたの身柄の話です」

「俺の」

「今夜から、俺がここに来ます」

この男は、俺の返事を待っていなかった。

最初から待つ気がない。

部屋に入ってきて、後ろ手に扉を閉めた。

閉めてから、初めて敬語をやめた。

「湯と布は運ばせてある」

「聞いてないぞ、俺は」

「今、言いました」

「今言われても遅いんだよ。そういうのは前
の日に……いや、前の日でも困るが」

＊

俺は窓のほうへ二歩下がった。

二階だ。下は中庭。飛び降りれば足首は折れるが、死にはしない。

窓の下を見た。

騎士が二人、松明を持って立っていた。

「そこにも手を回してあるのか」

「回しました」

この男は、俺が逃げる先を、俺が思いつく前に潰している。

俺は手首の痕を擦った。擦っても、今日は何も落ち着かなかった。

「なんで俺なんだ」

団長は答えなかった。

答えない代わりに、卓の上を見た。

昼の包みが、開けないまま置いてある。

「それか」

「……」

「それだけで、こんなことするのか」

「貰ったことが、ない」

言い方が、途中で詰まった。

この男が言葉に詰まるのを、俺は初めて見た。

ディーンが一步前に出た。

俺の背中が窓枠に当たる。もう下がれない。

「何をされるかは、分かっているな」

「分かってたら聞いてないだろ、こんなこと」

「今夜、あんたを抱く」

窓の外で松明が揺れた。

俺は自分の頭の中で、九巻分の記憶を全部めくった。

こんな台詞はどこにもない。

この男の行動だけ、俺の知識が効かない。

「断ったら」

「……」

「黙るなよ」

「断れる相手には、先に話をつけません」

＊

ディーンの手が、俺の襟に掛かった。

力は乱暴ではない。だが止まらない。

上着の留め具が、上から順に外れていく。片手だ。片手で全部やる。

「待て。順番が、あるだろ順番が」

「済んだ話です」

シャツごと肩から落とされた。

背中に窓の冷たさが当たる。前は男の体温だ。

逃げ場が前後で潰れる。

ディーンの手が、俺のズボンの紐に掛かった。

躊躇がない。焦らしもない。決まっていることを片付ける手つきだった。

紐が解けて、下着ごと膝まで落ちる。

俺のちんちんは、もう半分立っていた。

「なんで、こんな」

「知りません」

「知らんで済ますなよ、そこは」

団長は答えなかった。

答えずに、手だけを動かした。

大きな手が、俺のちんちんを根元から握った。

指の関節が、どれも一度は折れた形をしている。剣を握り続けた手だ。

その手が、根元から先まで、一度だけゆっくり擦り上げた。

「んっ、く……っ」

声が出た。

自分の喉から出た音だと気づくのに、少ししかかった。

手が熱い。皮膚が厚い。剣の柄でできた硬い部分が、俺の裏筋を引っ搔いていく。

「ぐっ、う、あ……っ、その手っ、硬すぎる
だろ……っ」

「握るものが硬い」

「そういう話じゃっ、あぁっ」

親指の腹が先端の割れ目を撫でた。

じわりと透明なのが滲む。ディーンはそれを

塗り広げて、亀頭ごと掌で包んで捏ねた。

ぬちゅ、と粘った音がした。

「ひ、っ、あ、あっ」

「声、出さないんですか」

「出したくないっ、っ、外に、騎士がいるだろうがっ」

「いません」

「は」

「下がらせました。門のところまで」

「……いつ」

「あんたが窓を見たときに」

この男は、俺が理由にした物を、理由にする

前に消している。

俺の腰が浮いた。ディーンの左腕が背中に回って、腰を抱え上げる。

爪先が床から浮きかけた。逃げられない。

しごく速さが上がった。ぬちゅ、ぬちゅ、と濡れた音が部屋に響く。

俺の先走りが、もう男の手を濡らしていた。

「待て、っ、一回止めろ、っ」

手が止まった。

本当に止まった。

止まらなかったのは、俺の心臓のほうだった。

「……止まるのかよ」

「止めろと言われたので」

「いや、あんた、さっき、断れないって言った
ただろ」

「話をつけたのは侯爵とソルグ家です」

男は、俺の腹の汚れを親指で拭った。それだけ
をやった。

「あんたとは、まだ何もつけていない」

この男は、そういう区別をする。

俺の知らないところで逃げ道を全部潰してお
いて。

それでいて、俺の口から出た言葉にだけは、
律儀に手を止める。

「……ずるいだろ、それ」

「どこがです」

「どこがって、それは」

言えなかった。

言えないまま、俺は自分の手を、男の手首に
置いた。

置いてから、置いた意味に気づいた。

「続けろよ」

「今、止めろと」

「気が変わった。値段の話だ。ここで中途半
端に終わられると、俺の持ち出しになる」

我ながら、ひどい嘘だった。

ディーンは何も言わなかった。

言わずに、手首の回し方を変えた。

先端を包んだまま、掌のくぼみでぐりぐりと
捏ねる。

ぬちゅっ、ぐちゅっ、と音が濁った。

「あああっ、そこっ、まわす、なっ、あ、あ、
あっ」

「腰が振れている」

「言うなっ」

「言う。振れている」

下腹の奥に熱が集まった。

睾丸が引き上がる。来る。

「あっ、あっ、待て、速っ、出る、出るからっ」

「出せ」

ディーンの手が根元を締めて、一気に擦り上げた。

どぶっ、と白いのが飛んだ。

二度、三度、脈を打って溢れる。男の手と、自分の腹を汚した。

膝が笑った。立ってられない。

「はっ、は……っ、く……っ」

息が整わない。

俺は前の世界でも、この世界でも、自分でやったことはある。

こうはならなかった。

「おい」

「なんだ」

「手、貸せ」

ディーンが、白いのがついた自分の手を出した。

俺はその手首を掴んで、掌を上に向けさせた。

「拭けよ。俺の部屋の布だぞ、それ」

「後で」

「あんた、後でしか言わないな。昼の菓子もまだ食ってないだろ」

ディーンの指が、一度だけ閉じた。

握った拳の中で、俺の出したものが潰れる音がした。

「食った」

「嘘つけ。包み、開いてもいない」

「……食う」

この男の言葉は、いつも過去形か未来形だ。

今の話をしない。

ディーンが、俺の体を抱えたまま寝台まで運んだ。

運ぶというより、荷物を移す動きだった。

仰向けに落とされる。天蓋の布が揺れた。

「明かりを消せ」

「消しません」

「なんでだよ」

「見えなくなるので」

＊

俺は肘をついて、体を起こそうとした。

ディーンの手が胸を押して、また倒された。

膝を掴まれて、胸につくまで折られる。

尻が浮いた。燭台の光が、そこに全部当たっている。

「見えてるって言ってんだよ、さっきから」

「見えています」

「……趣味か、それ」

答えが返ってこなかった。

返ってこないまま、視線だけが動かない。

嘘だ、と言い返す前に、ディーンが顔を伏せた。

出したばかりの俺のちんちんを、根元から先まで、舌でひと舐めした。

「うあっ!？」

熱い舌が、敏感になったところを這う。

腰が跳ねた。跳ねた腰を、太い腕が抱え込んで押さえた。

「まっ、今出したばっかだろっ、ひぐっ」

じゅぷ、と音を立てて、半分まで咥え込まれ

た。

口の中が熱い。舌が裏筋に貼りつく。

頬の内側で締めながら、ゆっくり上下する。

じゅば、じゅば、と濡れた音が耳から入って、
腰の奥に落ちていく。

「あっ、あっ、ああっ、それ、やば……っ」

男の口だ。剣を握る男の、傷のある顔が、俺
の股の間にある。

その画が、頭の中で音を立てて何かを壊した。

俺は自分の口を手の甲で塞いだ。

塞いだ上から声が漏れた。

「んーっ！ んっ、んぐっ、ふ、あ……っ」

ディーンが喉の奥まで飲み込んだ。

ずぶ、と根元まで。鼻先が俺の下腹に当たる。

その瞬間、男の喉が鳴った。

呻き声だった。咥えている側が呻いている。

俺は手をどけた。息を吸って、声を出した。

「なあ、団長」

返事はない。口が塞がっている。

「あんた、原作じゃ誰とも寝ないんだよ」

言ってから、しまったと思った。

通じるわけがない。この世界の誰にも通じない話だ。

だがディーンは、咥えたまま俺を見上げた。

灰色の目が、まっすぐ俺を見ていた。

じゅる、と嚙り上げる音がした。

「ひっ、あっ、あぁっ、待て、それっ」

男の手が俺の太腿に食い込んだ。指が沈む。

明日は痣になる。

じゅぷ、じゅぷ、と頭を振る速さが上がった。

喉の奥が先端に当たるたび、腰の裏に痺れが走る。

「ぐっ、あっ、あっ、そこ当たっ、当たってるっ」

ディーンの片手が、俺の袋を包んだ。

持ち上げるように、指の腹で転がされる。

「ひうっ、そこ触るなっ、出る、また出るからっ」

ディーンが動きを止めた。

止めたまま、啜えている。

「なんで止めた」

「まだです」

「なんだそれ。まだって何が。あんた説明が足りな……っ」

「溜めたほうが、あんたは崩れる」

「崩して、それであんたに何が残るんだよ」

ディーンが口を離した。

唾液が糸を引いて、俺の先から男の唇まで繋

がって、切れた。

「あんたは、菓子を渡すときに笑っていた」

「そりゃ媚びてるからな。愛想だよ愛想。得
しか考えてない」

「今は笑っていない」

「当たり前だろっ、こんな格好でっ」

「それでいい」

この男は、俺の作り笑いを見抜いていた。

見抜いた上で、菓子を三日持っていた。

「もう一回啜えろ」

「命令か」

「指示だ。金は払ってない」

ディーンがもう一度、根元まで飲み込んだ。

今度は速い。じゅぷ、じゅぷ、じゅぷ、と頭を振る。

喉の奥が先端を締めるたび、腰の裏に痺れが走った。

「ぐっ、あ、あっ、それっ、喉っ、締めるなっ」

勝手なことを言う男だ。

俺の体の話をしているのに、俺の許可を一度も取らない。

「あっ、あ、待て、指、なんで指っ」

いつの間にか、濡れた指が俺の尻のあいだを撫でていた。

唾液と先走りで濡れた指先が、穴の縁をぐるりとなぞる。

「ひ、あっ、そこはっ」

「今夜は入れません」

「じゃあ触るなっ」

「慣らします」

口を離して、ディーンがそう言った。唇の端が光っている。

「入れないって言っただろ、さっき」

「今夜は、と言いました」

指が一本、押し入ってきた。

ぬぷ、と音がして、第一関節が沈む。

「ぐっ、うう……っ」

太い。指一本で、この太さか。

内側を開かれる感覚だけが、はっきり届く。

指の腹の硬さ。爪。関節の節。全部わかる。

わかりすぎる。

「うあ、あ、あ……なんだこれ……っ」

「痛むか」

「痛くはっ、ないっ、けどっ、うあっ」

「なら進める」

ディーンが指を根元まで押し込んだ。ぬちゅり。

中でゆっくり回す。壁を探るように、腹側を

押し上げる。

その一点に触られた瞬間、背中が弓なりに跳ねた。

「ひあぁっ」

声が裏返った。自分の声とは思えなかった。

「ここか」

「なにがっ、あぁっ、待て、そこ押すな、っ、押すなっ」

ディーンは押した。二度、三度。

腹側を、内側から、押し上げる。

「あっ、あっ、ぐ、ふ、うあっ、待っ、変だ、なんか変っ」

触られていないのに、俺のちんちんがまた立っていた。

先からとろとろと透明なのが糸を引いて、腹に落ちる。

「覚えておけ」

「覚えなくていいっ、あぁっ」

「毎晩だ」

「毎晩っ、待て、そんな話は聞いっ、ひぁっ」

指の腹が、また同じ場所を押し上げた。

ぬちゅ、ぬちゅ、と中が鳴る。

膝が勝手に開いていく。閉じようとしても、力を入れる場所がわからない。

「なんであんたのほうがっ、俺の体に詳しいんだよっ」

「調べました」

「調べっ、どこでっ、いつっ」

「あんたが寝てから」

——待て。

——いつからだ。

訊こうとした。訊けなかった。

指が二本に増えた。ぐぶ、と押し広げられる。

俺は敷布を掴んだ。掴んだ手が震えていた。

顔を上げて、ディーンを見る。

男のほうが、ひどい顔をしていた。

額から顎まで汗で濡れて、口が半分開いている。呼吸が浅い。

指を動かしているのは自分のはずなのに、腰が小さく揺れていた。

「……あんた」

「なんだ」

「きつい、なら抜けよ」

「言っていないせん」

「顔に書いてある」

「……読めるなら、読んでいてください」

二本の指が、揃って腹側を擦り上げた。

「ひっ、あっ、あっ、あっ、だめだ、それ続

けるなっ、出るっ、また出るっ」

ぐちゅ、ぐちゅ、と中がかき回される。

指の腹が同じ場所を叩く。太腿が痙攣した。

爪先が丸まる。

「ラウル」

「呼ぶなっ」

「ラウル。ラウル」

名前を呼ばれるたびに、そこが締まった。

締まったのが自分でわかった。

「あ、あぁっ、やめっ、名前呼ぶな、締まるっ、
締まるからっ」

「知っている」

ディーンが指を三本目まで足した。

ぐぶっ、と根元まで沈む。三本まとめて、ゆっくり回される。

中がめいっぱい広げられて、褌が全部伸びるのがわかる。

「ひぐうっ、あ、あ、太いっ、三本、三本入ってるっ」

「二本だ」

「嘘つけっ、そんなっ、細いわけっ、あああっ」
嘘だとわかっていて、言い返せなかった。

数の話をしているのに、数がどこかへ行った。
ぬちゅっ、ぐちゅっ、と抜き差しが速くなる。

手首ごと使って、腹側の一点を叩き続ける。

腰が寝台から浮いて、落ちて、また浮いた。

「あっ、あっ、そこっ、そこばっかっ、壊れるっ」

「壊れない」

「知った風なっ、ことをっ、ひあぁっ」

ディーンが指を抜いた。

ぬぽっ、と音がして、中が急に空になった。

空になったところが、勝手に閉じようとして、閉じきらない。

「なんで抜くんだよ、急に」

「見てください」

ディーンが自分の指を、俺の目の前に持ってきた。

三本とも、根元まで濡れている。

燭台の光で、糸を引いているのが見えた。

「あんたの中から出た分だ」

「気持ち悪いこと言うな」

「覚えておけと、言いました」

言い終わる前に、三本がまとめて戻ってきた。

ぐぶっ、と一息に根元まで。

「ひぐうっ、あ、ああっ、いきなり入れるなっ」

「まだ足りないな」

「足りてるっ、足りてるってっ、あああっ」

中が指の形に開かれたまま、戻らなくなっている。

閉じようとするたび、指がそれを押し返す。

ディーンが空いた手で俺のちんちんを握った。

根元から先まで、一気に擦り上げる。

前と後ろ、両方。

中の指が押し上げるのと、外の手が擦り下ろすのが、逆向きに噛み合った。

逃げ場が、本当になくなった。

「——っ」

声が出なかった。

喉が開いたまま、音が出なかった。

体が跳ねて、白いのが胸まで飛んだ。

二度目とは思えない量だった。

中が指を締めつけて、離さない。

「ラウル」

「呼ぶ、なっ」

「ラウル」

絶頂の途中で名前を呼ばれると、締まりが止まらなくなる。

男の指が、抜けないまま俺の中で震えた。

そして、ディーンが呻いた。

俺の上に崩れて、俺の首筋に額を押しつけて、低く、長く呻いた。

腰が震えている。

指はまだ、俺の中に入ったままだった。

＊

どのくらい経ったか分からない。

外はまだ暗かった。松明の光が窓の下で揺れている。

俺は天井を見たまま言った。

「今のは、いくらだ」

「なんの話です」

「取引の話だよ。あんたが俺に何か求めた」

「……」

「求めたなら値がつくだろ。ただでやる人間

はいない。俺は、いない」

ディーンが体を起こした。指を抜く。

ぬぷ、と音がして、腰がまた震えた。

男は湯桶の布を絞って、俺の腹を拭いた。

拭き方が丁寧すぎた。

「自分でやる」

「もう始めています」

「始めたら最後までやるのか、あんたは」

「……そうです」

布が肋の下を通った。くすぐったい。

この男は、俺の返事を待たない代わりに、途中でやめることもしない。

「明日も来ます」

「聞いてない」

「今、言いました」

今日、二度目だ。この言い方をされるのは。

ディーンは布を桶に戻して、シャツを着た。

扉のところで立ち止まる。

「ひとつ条件がある」

俺は寝台の上から言った。

「言え」

「戸を閉めるな。寝るときは少し開けておく」

「理由は」

「あんたに払う分に、それは入っていない」

ディーンは何も言わなかった。

言わずに、扉を半分だけ開けたまま出ていった。

廊下の側に、燭台をひとつ置いていく音がした。

俺は起き上がって、窓のところまで歩いた。

脚に力が入らなかった。そこは自分にも黙っておいた。

中庭を見下ろす。

騎士は、もういなかった。松明も消えている。

その代わりに、厩の前に人が立っていた。

ディーンだ。

男は、俺の馬の鞍を肩に担いでいた。

そのまま、騎士団の兵舎のほうへ歩いていく。

俺の膝が、勝手に指を叩き始めた。

一、二、三。

明日、逃げるつもりだった。

その鞍は、明日の朝には厩になかった。

体験版はここまで

これは、まだ入口です。

この先で、すべてが変わります。
選択も、関係も、そして――結果も。

知らないままで終わるか、
それとも、最後まで見届けるか。

答えは、本編にあります。

処刑される悪役令息に転生したので断罪役の騎士団長に媚び
たら、逃げるたび捕まってケツの奥まで溺愛されています